

近代学術の源流

山田 利明

近代学術のもつ特徴を挙げるとすれば、以下の三点に要約できると考える。

- 一、論理的実証性
- 二、社会性
- 三、普遍性

第一の論理的実証性とは、真実の探究において、それを客観的、論理的に証明してみせることである。第二の社会性とは、その研究が社会性を持っているかどうかということである。もちろんあらゆる研究には、それぞれの意義があるわけだが、しかし社会的な意義があるか否かは別次元で問われる価値だといえよう。

第三の普遍性とは、その研究が他の研究に応用・適用し得ない研究であってはならないということである。研究自体が固有であると同時に、他のあらゆる研究に応用し得る普遍的な意味を持っているということである。研究自要するにこれらは、論理的に真実の真実たるゆえんを構成するための必要条件とも言えるものである。

近代学術の特徴を如上の三点に要約できるとすると、では清朝以前の学問とは一体何であったのか。

清朝以前の学問は、その殆どが「道の探求」を意味した。ここで言う「道」とは、儒教的な価値観にもとづいた「修身・齐家・治国・平天下」の道であり、またその探求は、主として古典の解釈を柱とした学問をその中心とした。たとえば朱子学にしても陽明学にしても、いずれも格物致知から平天下までの個人の修養を主とするいわば個人的体験にもとづいた求道の方法であったといえる。

ただし、実証性ということになると、清朝考証学は、かなり有効に作用したといえる。しかしながら、社会性、あるいは普遍性ということでは、欠落した部分が少なくない。

では、中国における近代学術の萌芽をどの時点に求めるのか。それは、やはり儒教的歴史観、つまり歴史を治乱興亡の王朝史と捉え、そこに教訓と治世の要を見ようとする姿勢からの訣別、歴史的な発展の中に、研究対象を位置づけようとする姿勢、こうした研究態度があらわれたときを、中国における近代学術の出発点と考えたい。その意味で、私は、厳復の「天演論」という論文に注目する。この論文は、一八九八年に『天津直報』という新聞に発表された論文の一つで、ダーウィン『進化論』(『天演論』)の意義を論じ、ハクスリーの進化論的倫理説に及んで、欧米学術のあり方、政治思想の状況を説いて、中国との対比を行っている。つまり、社会、歴史の発展という面から思想を考える思想史の原型が見えるのである。

もう一つは、一九一七年、胡適が北京大学で行った「中国哲学史」の講義である。それは、『詩経』を用いて周の時代を説明するという、画期的な講義であった。五経を儒教から切り離して、歴史資料としてのみ用いることには大

きな意味があった。しかも、それまでは、陳漢章が、中国の歴史を三皇五帝の時代から講じていたということを考えると、周代から説き始めた胡適の講義の新しさがどれだけ重要であったかが分るであろう（顧頡剛『古史辨』自序）。

先に、清朝考証学の有効性について言及したが、これについては、フランス中国学との関連を考える必要があるであろう。近代の、特に一九〇〇年以降のフランス中国学が、きわめて高いレベルにあったことは、広く知られている。その時期、フランス中国学の指導的立場にあったのは、Ed. Shavanne エドゥアール・シャヴンヌである。多くの研究とともに、いまなお用いられる中国古典の翻訳は、その学殖と研究法の確実さを示している。彼の学問基盤は、文献考証学である。それは、清朝考証学に範をとったといわれる。確かにシャヴンヌは、一八〇〇年代末に三年ほど、北京に留学しており、多くの清朝学者と交流している。むしろ、これが中国に逆輸入されて、近代的文献考証学を形成した可能性もある。

こうした近代的學術の動向にもとづいて、本日の報告を見てみると、『詩経』とそれにもとづいた古代社会のReconstructio、つまり再構築をテーマにしたものがあり、聞一多、王国維、さらに顧頡剛についての報告があった。儒教的經典としての『詩経』ではなく、古代資料としての『詩経』研究という視点を論じたもの、魯迅の小説史という観点、これらもまた、歴史を発展・発達として捉えるという進化論的視点から出たものと位置づけられる。文化対象を対象として、同様に歴史的に捉えるという方法は、多方面に及ぶが、ここでとり挙げられたのは、許地山『道教史』である。実は、この『道教史』は上巻だけの公刊で、下巻は未刊であるという点で問題が無いわけではないが、古代のシャーマニズムから説き起こして、道家の思想、神仙説などに及び、道教を中国古代の信仰・思想との関連の

上に位置づけようとする視点はまた近代的だと言えよう。事物の発展を歴史的にとらえるという方法にほかならない。

近代学術の手法の中で、特に歴史的な把握という点では、初期の業績の中にそれは多い。中国の近代学術の精華として『古史辨』を挙げることに異論を持つ人は少ないと思う。これは儒教から開放された古代史の再構築を目指したものである。顧頡剛・董書業・錢穆・呂思勉、同じ世代で『古史辨』に参加しなかった陳寅恪・湯用彤など、きわめて優れた学者が出た。大戦中に彼らは、いずれも西南連合大学に疎開する。そこにいたるプロセスとしての「学文」という雑誌の紹介があった。

以上、ごく表面的ではあるが、本日の報告を近代学術の方向性、あるいは理念というものを見ることから総括してみた。